

## 明治期におけるユカ座式食卓の変遷

Transition of Low Tables in the Meiji Period

デザイン学科  
車 政弘

Masahiro Kuruma

### 1.はじめに

明治期以降、日本の産業構造が激変し、主として欧米の技術・文化を移入し、ここで取り上げる家具の1品目に限らず、多くの新しい技術や新種の製品が登場することになる。またたく間に普及するもの、そして、緩やかにしか浸透しないもの、さまざまなパターンがあるが、ユカ座式食卓の変化をできるだけ詳細に検討することが本論の目的である。

具体的には「明治前期産業発達史資料」中の「勸業博覧会資料」の出品目録を分析し、また、これまでの「チャブ台」研究のなかで問題とされた事項や明らかにされた内容を整理してみたい。

### 2.内国勸業博覧会出品目録にみる膳、卓子類

内国勸業博覧会はイギリスにおけるロンドン万国博覧会やフランスにおけるパリ万国博覧会、明治6(1873)年のウィーン万国博覧会、同9(1876)年の米国でのフィラデルフィア博などに触発され、明治10年から実施されたものである。第1回内国勸業博覧会は明治10(1877)年、第2回は明治14(1881)年、第3回は明治23(1890)年、いずれも東京で行われ、第4回は明治28(1895)年京都で開催され、第5回は明治36(1902)年、大阪で開催された。博覧会は農林水産業、工業、商業等、産業一般及び技芸、学術等の文化についてその活動、成果を一般社会に周知させる催しである。内国勸業博覧会は当然、殖産興業の国家的命題に沿うものであった。

この内国勸業博覧会に膳や卓子類が「工業」の一分野として出品されたが、その実態を見てみたい。リストアップする品目については膳や卓子の名称の他に、机、椅子についても記録を行った。

それは当然、今日まで続く起居様式の変化の資料にもなりうるからである。「膳」は椀や盆と一式の形で出品されることが多いが、椀また盆という名称のリストアップは省略した。その概要は次の通りである。

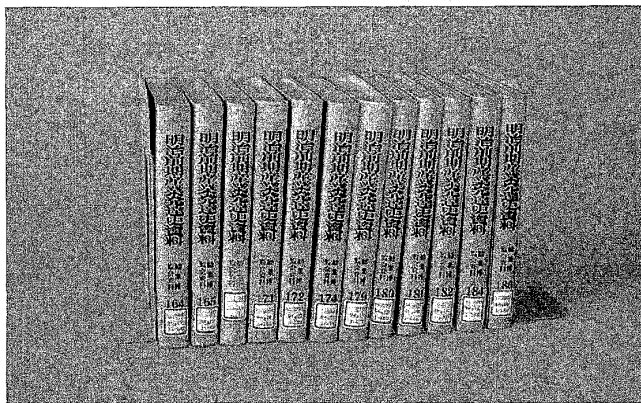


図1. 明治前期産業発達史資料 勸業博覧会資料の1部

#### 2.1 第1回内国勸業博覧会の出品目録 (注1)

2.1.1 机のうち「唐机銀杏木抽匣付」など唐机とするものが3点、「机中折紙杉本ノ一閑張」、「張机」は一閑張りの机である。

2.1.2 テーブルという名称でも、室内に配置されるものとは限らない。愛知県春日井郡瀬戸村から出品されている「テーブル六角形草花畫」、「テーブル板陶丸形草花文様」は明らかにガーデンファニチュアである。

2.1.3 卓という名称はその使用樹種や装飾から見て座敷・客間、洋風客間の設えに用いられることを前提としているものが多く含まれていると考えられる。甲板面円形のものには「寄木圓卓」、「圓卓」、「卓圓形面寒水石」などが挙げられる。

表1. 第1回~第5回内国勸業博覧会出品目録記載の机, 卓, 膳, 椅子の傾向

	出品物 品名	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
机		9	53	34	44	7
	唐机 (紫檀・花梨・チャンチン)	3	16	4	21	5
	一閑張机	2	9	14	0	0
	その他の机 (机櫨、桑、春慶塗、書案等)	4	28	16	23	2
テーブル	テーブル・ターフル・ターブル・丸テーブル	20	18	17	14	0
卓		20	35	48	103	83
	卓子・折卓子	0	1	1	4	7
	円卓・丸卓	2	0	1	7	10
	春日卓	0	0	1	10	0
	高卓・高案	2	10	3	11	8
	平卓	1	5	4	13	7
	食卓	10	5	14	18	5
	一閑張食卓・一閑張テーブル	0	2	1	0	0
	會食膳*・常食膳	0	*2	1	0	0
	その他の卓・含む中央卓	5	10	22	40	46
臺		0	2	16	26	4
	チャブ臺・*シツク臺	0	0	1	0	*1
	喰臺・膳食臺・食臺・飯臺	0	1	5	**18	1
	飲食臺・西洋飯臺・回し臺・中央臺・大臺・足据臺	0	0	10	1	0
	茶呑臺・茶卓・茶盤臺	0	1	0	3	1
	その他の臺	0	0	0	4	1
膳		25	129	252	532	17
	會席膳	11	29	167	266	5
	吸物膳	1	21	41	68	0
	木具膳・器具膳	1	13	10	19	0
	夜食膳・夜喰膳	1	8	5	5	0
	宗和膳・惣輪膳・惣輪臺・伊勢形膳	2	1	2	8	0
	鉢臺・肴臺・井臺・盃洗臺・飯臺	2	12	1	1	0
	箱膳	0	3	0	7	3
	折敷・折敷膳	0	3	5	5	0
	一閑張膳 (酒肴臺)	0	3	0	0	0
	その他の膳	7	35	21	153	9
椅子	椅子・椅子	31	27	37	45	86***
	寝椅子・安樂椅子	2	0	0	0	1
	曲木椅子・曲木腰掛	0	0	0	0	10
	総数	105	264	404	764	197

\*會食膳2点は紫檀製卓に含める

\*\*第4回博

「飯臺」は「はんたい」と読む

\*\*\*第5回博

椅子はセットものも1点とした

2.1.4 食卓中3点「食卓槐木地丸形象眼入り」, 「食卓楓地塗丸形」, 「食卓檜漆喰圓形鼎足」はその甲板形状が円形であることを示している。前者2点は工部省工作局の出品物である。

2.1.5 「高卓」, 「平卓」の実態はよく分からないが, 中橋音三郎 (石川県新川郡富山一番町) の出品「高卓紫檀」と紫檀が使用され, 『明代家具珍賞』(注2)などに紹介される香炉を載せる「香几」, 酒宴に用いられる「酒卓」, 「方卓」, 「條卓」, 「案」, 「炕案」, 「炕几」の類が想定されるが, 一方中国の盆栽 (中国盆景) に使用される台, 几架の類の可能性もある (注3)。概ね床の間の「卓飾り」用であろう。

2.1.6 膳は第1回に限らず漆器産地から多く出品されるが, 例えば「會席膳」の出品者はさまざま

な漆器製品を出品していることが多い。「會席膳」は禅家の語として小食, 夜食のこととして「懷石」と称していたものが, 茶道における茶会の席の料理をも指す用語となり, 寛政, 文化年間の頃より, 料理茶屋のスタイルとして銘々盛りのかたちの配膳が定着し, この様式を支える膳の様式として「會席膳」が一般的なものとなった。従って, 「會席膳」は多くの客の宴席や祝儀など, いわばハレの食事を演出するものである。塗りは通常黒漆塗りが代表的なものである。

2.1.7 明治10年の椅子の出品は31点で他の品目に比べて多いことが分かる。そのうち籐椅子 (含む: フレームに檜, 楓, ケヤキを使用するもの) は8点である。



図2-1. 一閑張り風卓子(撮影:1987年, 高松市)

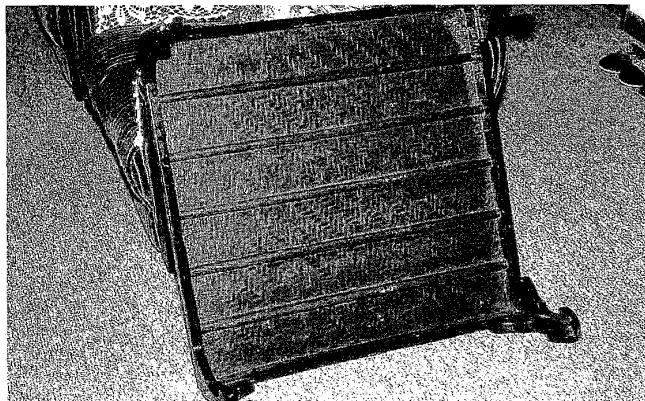


図2-1. 一閑張り風卓子(裏面)(撮影:1987年, 高松市)

## 2.2 第2回内国勸業博覧会の出品目録 (注4)

2.2.1 机の項目で特筆されるのは9点の一閑張り机が出品されていることである。食卓、膳の項目における「一閑張り」を含めると13点となる。以下( )内は出品者の住所である。「一閑張机杉紙四脚上面黒塗」(東京府本郷)、「机杉美濃紙一閑張」(大坂府南区)それぞれ3点、「机檜一閑張引出付キ」,「食卓檜一閑張」,「洞張膳檜一閑張」(愛知県愛知郡名古屋区)などが挙げられる。また「唐机」とするものの中でも「唐机檜紙張平面能代塗」(東京府本郷)が4点あり,「一閑張り」の可能性も考えられる。一閑張りの卓子,机は木材のみで広い平面を製作することが困難な時期に卓子や机の基本的製作技法として成立していたことが考えられる(図2-1, 2-2)。『木材ノ工藝的利用』にその詳細が記述されている(注5)。

2.2.2 テーブルという名称がつけられてはいるが,その使用樹種,仕上げなどから,中国風,もしくは漆器をベースとしたものが大半を占める。

しかし「テーブル楠ワニシ塗」(京都府下京区,熊川商社)「寄木テーブル胡桃櫻杉埋木檀」(岩手縣南岩手郡)は西洋風のものの可能性がある。

2.2.3 食卓は5点であるが,「會食膳紫檀桃彫」(大坂府西成郡)などや,前述の「洞張膳檜一閑張」(愛知県愛知郡名古屋区)などを含めると9点となる。「中央卓山黒木屋久貝塗」(沖縄縣那覇)は4点であるが,詳細が不明なので独立項目とする。

2.2.4 會席膳は29点と多く,また続く吸物膳も21点,夜食膳も群馬縣からの出品が目立つ。膳全体としては129点で最も多い。仕上げは「春慶塗」が41点,朱漆が使われるもの25点である。箱膳は別称折助膳とも呼ばれるものだが,博覧会に出品されるのは稀である。なぜなら,日常主として使用人が用いるものであり,ハレの席を構成するものではなかったからだ。しかし,基本的な箱膳の形で,仕上げをしっかりとしたものであろう。「箱膳檜津軽塗模造」(東京府日本橋通)、「箱膳栗外春慶内黒」(群馬縣廳)などがある。

2.2.5 肴臺,鉢臺,井臺,盃洗臺でまた一閑張の例が挙げられる。「酒肴臺紙一貫張」(山口縣阿武郡)である。「井臺檜材漆汁朱塗無地」(愛媛縣新居郡)も膳の一揃いになっているものである。

2.2.6 椅子は27点で高級感のあるものとして「椅子檜轆轤操脚摺漆蒲団舶来緞子」(東京府神田和泉町・精工社)などがある。

## 2.3 第3回内国勸業博覧会の出品目録 (注6)

出品目録には京都府,大阪府,神奈川県,兵庫県からの出品目録が欠落している。

2.3.1 机について唐風が継続していることは変わりが無いが,一閑張机の点数が多い。出品者は東京府京橋区,浅草区である。

テーブルのなかで東京府京橋区の橋本三右衛門は小椅子,男椅子,女椅子を出品しており,椅子とセットのテーブルであることが分かる。同様に東京府京橋区の布施惣吉のテーブルも椅子とセットである。東京府神田区の森三五郎の出品も「紫竹製テーブル」,「紫竹製臂掛椅子」,「紫竹製椅子」と椅子とのセットである。



大分縣後藤友六、中山芳三ヨリ明治廿四年四月四日ニ出願シ今年五月十三日附テ以テ十箇年ヲ期限トシ特許シタル第一一八八號特許證ニ屬スル明細書左ノ如シ

第一一八八號

卓子(折脚)

此發明ハ藏置ニ便ナラシムル爲メ足ヲ起伏自在ナラシムヘキ板ニ係リ其目的トスル所ハ足ヲ起シ又伏シタル際之ヲ止ムルノ装置ヲ堅牢ニシテ永ク其用ニ堪ヘシムルニ在リ  
別紙圖面ハ本器ノ構造ヲ示ス即チ其第一圖ハ板ノ縱斷面圖第二圖ハ足倒シテ板ノ裏面ヨリ見タル圖ナリ  
同シ符號ハ同一ノ部分若クハ同様ノ部分ヲ示セルモノトス  
爾其他任意ノ形狀ニ作り而シテ其裏面ニハ適當ノ方便ニヨリテ板ヲ固着シ板ノ相對セ右兩圖ニ於テ  
(一)ノ兩端ノ軸ヲ架シ此板ハ足ニニテ固着シ足ニ(ハ)板ハ(ト)共ニ起伏自在ナル如クス板(イ)ハ方セル足ハ之ヲ倒シタル時相重ルナク並行板(イ)内ニ收メ得ヘキ様ニ取者ク板(ハ)ノ間ニ兩側ニハ板邊ニ添フ所ニ軸ホテ具フル板(イ)ヲ設ケ其軸ホテ板(イ)トノ間ヲ經テ板(イ)ニ架シ起伏而シテ相對在ナラシメテ足(二)ヲ起シタル時板(ハ)ノ間ニ止ムルノ用ニ供シ又板(イ)ノ内側ニ小孔ヲ穿テ其孔ノハ一底ニハ護脚片又ハ之ニ適當ノ彈片ヲ收メ又此孔ニ突子(ト)ヲ挿入シ突子(ト)ニハ楕圓形ノ孔ヲ縱ノ向キニ自積貫シ(運ロ)ノ外側ヨリ小孔ヲ挿入シテ其拔出ツルヲ止メ突子(ト)ハ常ニ一定ノ位置迄突出セシム又之

四、五

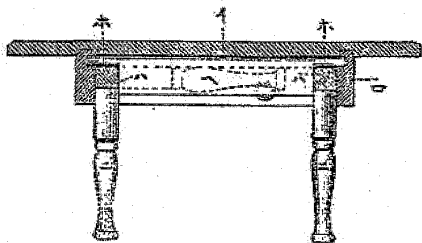
ヲ少シク没入セシムルヲ得故ニ足(二)ヲ倒ストキハ突子(ト)ノ頭ヲ推シテ少シク之ヲ没入セシム其位置ヲ超過シタル時ハ突子(ト)ハ之ヲ固着シタルモノニ比スルハ其頭カ多少磨滅スルトモ永ク其用ニ堪ニルヲ作ルナリ  
本器ヲ使用セントスル時ハ足ニテ悉ク起シ又板(イ)ヲ起シテ足ニ倒ル、ヲ止メ又之ヲ藏置セントスル時ハ板(イ)ヲ倒シテ其足(二)ヲ倒スヘシ然ル時ハ初メニ説明セル如ク足(二)ハ突子(ト)ニテ其自ラ起ツテ止ムラル、ナリ  
特許條例ニ依リ自分共カ此發明ノ保護ヲ請求スル區域ヲ左ニ掲グ  
一板(イ)ト板(ロ)ノ本體ニ詳記シ且ツ別紙圖面ニ示セル如ク足(二)ヲ固着セル板(ハ)及ヒ板(イ)ト彈力ノ作用ニテ常ニ一定ノ位置迄突出シタル突子(ト)ノ組合ヨリ成ル卓子(折脚)

大分縣日田郡隈町大字川原町三百五十一番地原籍  
東京府京都市日本橋區錦町三丁目六番地中出芳三方寄留  
發明者 後藤 友六  
大分縣日田郡隈町二百二番地原籍  
東京府京都市日本橋區錦町三丁目六番地寄留  
同 中山 芳三

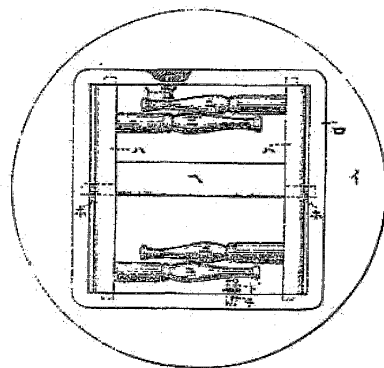
図4-1. 特許1188号 明細書

卓子(折脚)

第一圖



第二圖



明治廿四年五月十三日  
第一一八八號

後藤友六  
中山芳三

図4-2. 特許1188号, 明細書 卓子(折脚)図



(注14,15)で「この一世紀のあいだに、日本人の食卓は一人用の膳(銘々膳)から、チャブ台を経て、イスに腰かけて食事をするダイニング・テーブルへと変化した。食卓の変化に応じて、配膳法、盛りつけ、食事作法など食事の場における美意識とその背後にある食卓でのふるまいかたの規範もまた変化をとげてきたものと考えられる。-中略-そこで「食卓の変化」に関する調査をおこない、実証的研究をすることが可能な資料を収集する必要がある。」とし、「チャブ台の登場」、「チャブ台の普及」、「秩序を重んじた膳の席」、「だんらん」の思想、「ダイニング・テーブルの食事」、そして「家庭から聖なるもの、公なるものを排除し、禁欲的な秩序から安楽さを追求する方向をたどってきたことである。」と「形式の没落」という過程を描出している。

村本孝博・平井聖「明治期の家政学書・辞書等からみた共同で食卓を囲む床座式の食事形式と食卓について(チャブ台考)」(注16)では家政学関係の文献にみられる食事形式に関する記述、明治期に刊行された家庭・婦人雑誌(明治25年9月から31年8月の「家庭雑誌」、明治36年4月から45年2月の「家庭の友」と明治41年1月から大正2年12月までの「婦人の友」等の記述から、次のような諸点を結論づけている。

「チャブダイの名称は、明治26年刊の『日本大辞典』(山田美妙)にはじめてみることができ、「ちゃぶだい、チャブチャブする台=食盤」と記される。

また明治期の辞書にはチャブダイに「ちゃぶだい」「チャブ臺」としており、辞書以外の資料においても「食机」「餉臺」「茶部臺」などを用いていて、いずれも当て字であると考えられる。管見するところでは、「卓袱台」の字を当てているのは、大正5年刊の『大日本国語辞典』が最初で、ちゃぶ台の名称は、俗語としてその音からはじまったと考えられる。」

明治期に刊行された家政学関係の文献によれば、日常生活における食事の形式は、明治20年代から【膳】から【座式の食卓】を用いる形式へと変化が始まり、明治30年代に【膳】と【座式の食卓】の

比率が逆転し、【座式の食卓】による食事形式が一般的になったと考えられる。」と結論づけている。

また吉田忠は「ちゃぶ台・ご用聞き・小売市場」(注17)で、新たな食卓形式は大正期、急速に核家族が増大した都市の家庭で普及したと指摘している。

こうした研究の中で石毛直道・井上忠司編「現代日本における家庭と食卓—銘々膳からチャブ台へ—」(注18)が発表される。確かに【膳】と【座式の食卓】は近代化イデオロギーの中でその勢力分布が変わったかに見えるが、実はそれはごく限られた都市部でのことであり、井上忠司を中心とする調査では「チャブ台」=【座式の食卓】の普及は昭和初年から昭和40年代だということが、実証されている(注19)。したがって、家庭の食卓形式が変化する時期というのは、初出の時点と普及する時期とで大きな隔りがあることを留意しておかなくてはならない。

### 3.2 夏目漱石の『門』に描かれる食卓

ここで改めて、食卓形式の変遷研究に火をつけた多田道太郎の指摘を追い、夏目漱石の『門』(注20)に描かれる食卓をトレースしてみたい。引用文のページ数は夏目漱石『門』(新潮文庫 昭和23年初版)の該当ページである。

1. 「宗助と小六が手拭いを下げて、風呂から帰って来た時は、座敷の真ん中に真四角な食卓を据ゑて、御米の手料理が手際よく其上に並べてあった。」 p.23

「兄弟は寛いで膳に就いた。御米も遠慮なく食卓の一隅を領した。宗助も小六も猪口を二三杯づゝ干した。」 p.26

2. 宗助も年齢のせいで歯を悪くする場面。「三四日前彼は御米と差し向かひで、夕食の膳に着いて、話しながら箸を取ってゐる際に、何うした拍子か、前歯を逆にぎりゝと噛んでから、それが急に痛み出した」 pp.77-78

3. 親戚のごたごたで学資のつるを失った弟の小六が宗助のうちに転がりこんでくる。「小六が引き移ってから此四五日、御米は宗助のいない午飯を、何時も小六と差向で食べる事になった。宗助と一

所になって以来、御米の毎日膳を共にしたものは、夫より外になかった」 pp.118-119

「御米は小六と差向に膳に着くときの、此氣ぶつせいな心持が、何時になったら消えるだろうと、心の中に私に疑った」 p.119

4. 宗助もいっしょに夕食をとる場面。「彼(宗助)が暗い所から出て、晩食の膳に着いた時は、小六も六畳から出て来て、兄の向ふに坐った。御米は忙しいので、つい忘れてと云って、座敷の戸を締めに立った。宗助は弟に夕方になったら、ちと洋燈を点けるとか、戸を閉てるとかして、忙しい姉の手伝でもしたら好からうと注意したかったが、昨今引き移った許のものに、氣まづい事を云ふのも悪からうと思って已めた」 p.130

5. 御米は小六のために、わざわざ起きて、一所に食事をする根気もなかった。清にいい付けて膳立をさせて、それを小六に薦めさしたまま、自分はやはり床を離れずにいた。-中略-

小六は六畳から出て来て、一寸襖を開けて、御米の姿を覗き込んだが、御米が半ば床の間の方を向いて、眼を塞いでいたので、寝付いたとでも思ったものか、一言の口も利かずに、又そっと襖を閉めた。そうして、たった一人大きな食卓を専領して、始めからさらさら茶漬を掻き込む音をさせた。 p.151

6. 「医者が帰ったあとで、宗助は急に空腹になった。・・清を呼んで、膳を出せと命ずると、清は困った顔付をして、まだ何の用意も出来てみないと答へた。成程晩飯には少し間があった。宗助は楽々と火鉢の傍に胡座を掻いて、大根の香の物を嘯みながら湯漬けを四杯ほどつゞけ様に掻き込んだ。」 pp.163-164

7. 火鉢の傍には彼の常に坐る所に何時もの坐蒲団を敷いて、その前にちゃんと膳立がしてあった。宗助は糸底を上にしてわざと伏せた自分の茶碗と、ここ二三年朝晩使い慣れた木の箸を眺めて、「もう飯は食わないよ」と云った。 p.181

多田道太郎が例示した7つの食事風景とは別に『門』には食卓研究の視点で読むとまだ追加できる表現がある。

A, 乾物屋と麵麩屋の間に、古道具を売っている可なり大きな店があった。御米はかつて其所で足の畳み込める食卓を買った記憶がある。 p.93

B, (御米は)一人で何時もの様に簡単な食事を済まして、清に膳を下げさしていると、いきなり御免下さいと云って大きな声を出して道具屋が玄関から遣って来た。 p.95

C, 泥棒が隣の大家、坂井さんの家に入った次の朝、夫婦はともかくもと云うので、文庫を其所へ置いたなり朝飯の膳についた。 p.109

D, 主人公で公務員の宗助の住む借家の大家である坂井が小狡い道具屋のことを、このようにいう場面がある。

「まあ台所で使う食卓か、たかだか<sup>あら</sup>新の鉄瓶位しか、あんな所じゃ買えたもんじゃありません」と云った。 p.128

以上のように4カ所追加できる。特に注意したいのは、Aの「足の畳み込める食卓を買った記憶」というのは具体的な構造が示されている点である。またBは食卓全体が移動させられているのか、食器類を下げていのかは判然としない。Dでは食卓に「ちゃぶだい」とルビが振られている点が注目される。

『門』は明治43年に「朝日新聞」に連載された。

### 3.3 森田草平の『煤煙』に描かれた食卓

森田草平の『煤煙』(注21)は明治42年に発表されたものである。この小説の主人公小島要吉(作者自身)と、眞鍋朋子(平塚雷鳥女史)との恋愛事件を取り扱った作品である(注22)。この小説の中には次のような食事光景が描かれている。引用文中のページ数は森田草平『煤煙』『現代文学全集22 寺田寅彦・森田草平・鈴木三重吉集』、筑摩書房、昭和30(1955)年の該当ページである。

要吉の妻隅江が出産のため、郷里に帰り、要吉は自らも郷里に久々に帰る。要吉の母、お絹の家に到着後の光景である。

1. 「要吉は風呂から上って、お絹が据ゑた食膳に向った。お絹は盆を持って側に坐って、お給仕をしながら、種々三年の間に變った村の噂をした。」



p.146

ここでは岐阜の田舎のこと故、「食膳」は銘々膳か、新しい食卓の形態かは判然としない。しかし、

2. 「二三度呼ばれてから漸と聞附けて、要吉は知らぬ間にお絹が汲んで置いた金盥の湯で、べちゃべちゃと顔を洗ったまゝ、家の中へ這入って行った。茶の間ではお絹が膳立てをして、長火鉢の側に子然として待っていた。要吉は座に着いたが、茶碗が二つ伏せてあるのを見て、「阿母さんも喫らないで、待ってゐて呉れたのですか。それは何うもー」」 p.147

という表現から、銘々膳ではないことが窺われる。

3. 「小母さんは一寸二人の顔を見たまゝ、別に氣にも留めぬ様子で、片隅へ寄せてあつた朝飯の膳を出して侷めた。」 p.165

4. 要吉が机に向かつて長い手紙を書き終わったところへ

「恰度そこへ隅江が夕餉の膳を持って來たが・・・」とあり、「膳の前に直された座蒲団の上に坐って、器械的に箸を上げたが、何を喰っているのか自分でも知らない。」ここでは、銘々膳が登場している。 p.221

5. 明るく朝、要吉はやつと九時前に寢床を出た。楊枝を啣えながら茶の間を覗くと、小母さんは餉臺の上に小皿や茶碗を伏せて、その上に布巾を被けたまゝ、ぼんやり待ってゐる。 p.226

この5カ所の表現には銘々膳も登場するが、要吉の実家と丸山の家<sup>ちやぶだい</sup>の日常には5の餉臺が使用されていたとみるべきだろう。

『門』には「腰弁夫婦の平凡生活」あるいは「腰弁宗助の平凡生活」が描かれ、『煤煙』では要吉と、平塚雷鳥がモデルとされる眞鍋朋子との壮絶な恋愛が日常生活と共に描かれている。この主人公はいずれも都市の勤労者であり、知識人である。多田道太郎が一石を投じた慧眼はその後の研究へと受け継がれるのである。

### 3.4 徳田秋声の『新所帯』に描かれた食卓

もう一点、これまでに指摘されなかった明治41年の小説をここに取り上げておきたい。それは徳

田秋声の『新所帯』(注23)である。

『新所帯(しんじょたい)』は明治四十一年秋、「國民新聞」文藝擔當者としての高濱虚子の好意により、新しき中編小説を試む。本集巻頭の『新所帯』がそれである。自然主義的、人生派的傾向の最初の試みといふにふさはしい。新潮社より上梓。世評高し(注24)。」と末尾の年譜にある。

新吉とお作の婚儀の翌朝の情景が描かれる。

八 朝飯の時、初めてお作の顔を熟視することができた。狭い食卓に、昨夜の残の御馳走などを駢べて、差向で箸を取ったが、お作は折々目をあげて新吉の顔を見た。 p.8

三十八 「しばらくすると、<sup>チャブダイ</sup>食卓がランプの下に立てられた。新吉は頻りに興奮した様な調子で、「酒をつける酒をつける。」とお作に怒鳴った。 p.32

この2つの表現からはっきりと、当時はやりはじめたチャブ台の位置づけが分かる。小商いを都市ではじめた夫婦二人の新しい食卓様式が脚を折り畳む形式の食卓であることが分かる。食卓を立てるという表現には、立てる操作が含まれている。膳立てとはかつての銘々膳でも使われることばで、一通りの料理が整った様子を表現することばであるが、ここでは食卓に「チャブダイ」と振り仮名を振り、続く「立てられた」は明らかにこの食卓の構造がイメージされていると言えよう。こうした都市の庶民の中で使われはじめたことが理解できる。

つまり、明治41年の『新所帯』、明治42年の『煤煙』、そして明治43年の『門』に新たな都市生活者の食卓「チャブ台」が小説の重要な装置として、描かれるようになったのである。

さらに村本・平井論文には『吾輩は猫である』の挿絵に丸い食卓が描かれているという(注25)。「吾輩は猫である」が発表されたのは明治37(1904)年であり、明治30年代には都市部を中心に普及しはじめたことが分かる。こうした初期の普及過程は主として明治40年代の小説によって明らかである。

## 5. 結び

内国勸業博覧会の出品目録と多田道太郎の指摘とその補充について、明治期のユカ座で使用する食卓の実態を見てきたが、各種の「銘々膳」と「チャブ台」の間に「一閑張り」の卓子が出現していたことが読み取れる。また、明治10年という早い時期から椅子とテーブルのセット、あるいは椅子と机のセットが内国勸業博覧会に出品されていたことも分かる。そして、椅子式の食卓・卓子の出品は着実に増加する傾向が分かる。しかし、机、卓子というとき中国風の、いわゆる座卓(座敷机)が多く生産され、西洋風の客間と同じくらいに、いやそれ以上に座敷という客間用の机、卓子が指向されていたということも事実である。本来座敷は机や卓が置かれる空間ではなかった。そこに中国風の机、卓子が設えられるのは、書院造りの大きな変化をもたらすことになったと見るべきだろう。

またこの博覧会を通じて各地の漆器産地からは「會席膳」というハレの食卓が主要な出品物として挙げられる。料理茶屋から一般化した「會席膳」がこの明治期に多く生産され、勸業博にも数多く出品されたということは、本格的な會席膳文化の定着期と見ることができよう。

「チャブ台」という名称は第3回内国勸業博覧会に1点出品があるのみだが、明治30年代から40年代にかけて小説には登場する。日常生活の場面を表現する装置としての「食卓」は、高級さに欠けていたせいか、博覧会の出品物の名称としては定着しなかったと考えられる。ただ、同じ第3回内国博の「折込足食卓」は当時の発明品の一つではないかと考えられる。第5回内国勸業博覧会出品目録中には「折足机」も登場する。

また多田道太郎の指摘の他に徳田秋聲の『新所帯』が明治41年に上梓され、明治41、42、43年の小説にチャブ台が引き続き登場していることは注目される。それは『木材ノ工藝的利用』に述べられる東京におけるその生産の動向と符合する内容である。しかし、こうした初出の問題と、全体的な普及の間には数10年間の開きがあることが、近・現代日本家庭の食卓の変遷の大きな特徴だといえるだろう。

## 注

- 1) 『明治前期産業発達史資料 勸業博覧会資料；178-188』、内国勸業博覧会出品目録(事務局)、明治10年、明治文献資料刊行会、昭和50(1975)年
  - 2) 王世襄『明代家具珍賞』、三聯書店香港分店/文物出版社(北京)聯合出版、1985
  - 3) 胡運驊、『中国盆栽』、萬里書店有限公司、1987
  - 4) 『明治前期産業発達史資料 勸業博覧会資料；164-174』、第二回内国勸業博覧会出品目録(事務局)、明治14年、明治文献資料刊行会、昭和50(1975)年
  - 5) 農商務省山林局編、『木材ノ工藝的利用』、pp.324-325、大日本山林会、明治45年(復刻；(財)林業科学技術振興所、昭和57(1982)年)
- 「一閑張り卓子」生産の実態は次のように述べられている。

「其ノ五 一閑張り卓子

### 一 總説

「種類 一閑張りハ名古屋ヲ本場トナシ、角形及ビ長手ノ二種アリ。前者ハ主トシテ食卓用、長手ハ机ノ代リニ用フ。

製造家 東京市ニ於ケル一閑張り製造所ハ三戸。仕上職人(小僧共)凡そ十人ニシテ一か年ノ製造高、五千個位ナリ。本品ハ今日ハせんノ茶部臺ニ壓倒セラレタルノ觀アリ。先ズ需要ハ現状維持ナラン。

### 二 材料

種類 すぎ、さはら、ひのき、紙及ビ漆ニシテ、材ハ凡テ輕キヲ尚ビ、普通さはら及ビすぎヲ用ヒ、上等物ハひのきヲ用フ。

製造 すぎハ四分板、サハラハ五六分厚ノ板ヲ用フ。脚及ビ外枠、棧(六分厚、七分幅)ハさはらニシテ鏡板ハスギナリ。木地屋ニヨリテ木地ヲ製作シ、其ノ外圍ニ本草物ノ紙ヲ數層張り重ヌルナリ。下等物ハ本草物ノ代リニ新聞紙等ヲ使用ストイフ。紙ハ鏡板ニハ直接膠着シ居ラズ。紙ヲ貼ルニ用フル料ハ柿澁ヲ混ゼル生麩糊ヲ使用ス。紙ノ上ニハ澁地ヲ置キ、其ノ上ヲ漆塗リニナス。大キサ(脚ハ凡テ高サ一尺)ハ種々アリ。

角ニハ二尺五寸ヨリ一尺四寸迄、一寸五分宛落チノ八種アリテ互イニ組入レトナルナリ。特別ニ三尺位ノモノアレド之等ハ紙ノ代リニ布ヲ用フトイフ。

長手ニハ最大ノモノ長サ三尺、幅二尺。細小長サ二尺一寸、幅一尺ニシテ其ノ間ニ一寸五分違ヒノ五種アリ。

製品価格

二尺五寸角仕上ゲ 二円七五銭。

同木地 ○円六五銭。

二尺 角仕上ゲ 二円二〇銭。

尺四寸角仕上 一円二五銭。』

6) 『明治前期産業発達史資料 勸業博覧会資料；128-144』, 第三回内国勸業博覧会出品目録(事務局), 明治24年, 明治文献資料刊行会, 昭和49(1974)年

7) 村本孝博・平井聖「明治期の家政学書・辞書等からみた共同で食卓を囲む床座式の食事形式と食卓について(チャブ台考)」p.103, 日本生活文化史学会・雄山閣出版編『生活文化史3号』, pp.94-104, 雄山閣出版, 1984

8) 車政弘, 「チャブ台の生産と流通」石毛直道・井上忠司編, 『国立民族学博物館研究報告別冊16 現代日本における家庭と食卓—銘々膳からチャブ台へ—』, pp.119-239, 国立民族学博物館, 1991  
車政弘, 「ちゃぶ台・飯台・食空間」芳賀登・石川寛子監修『全集日本の食文化第9巻 台所・食器・食卓』, pp.269-283, 雄山閣出版, 1997

9) 農商務省山林局編, 『前掲書』, pp.323-324  
「チャブ台」に関する記述を列挙すると次の通りとなる。表記は句読点を挿入し, また表記が不統一な表現は漢字も一部改めた。

其ノ四 茶部臺

一 總説

茶部臺ハ折脚製ナルヲ以テ之ガ取扱及保存ニ便ニシテ殊ニ市街住家ノ如キ室内狭隘ナル場合ニ於イテ、勝手道具トシテ最モ便利ナルヲ以テ、近來大ニ需要ヲ増加シ、地方ニ向ケテモ漸次販路ヲ拡張スルニ至レリ。之ガ為ニ一閑張及ビ他ノ膳類モ、之ガ影響ヲ受ケテ需要ヲ減少スルニ至レルガ如シ

茶部臺ハ東京及ビ大坂ニテ多ク製作セラレ、就中大坂ノ方生産額大ナリ。其ノ他名古屋ニ於イテモ少シク製作セラル。

東京市ニ於イテ茶部臺製造卸ヲ業トスルモノ五十軒、茶部臺問屋百軒、職人五百人アリ。最モ需要多キセンノ茶部臺ハ一人一日大小込ミ八箇ヲ製ストイフ。

せん茶部臺ノ製造高ハ一日三千個(此ノ外西洋鏡臺五百個くり火鉢五百個ナラントイフ)

製造價格ハ一個四十銭乃至二圓ナリ。

二 材料

せん、やちだも、しほじ、けやき、紫檀、花梨ニシテ敷物ニハせんヲ用ヒ、中等モノニハやちだも、しほじヲ用ヒ、上等物ニハけやき、極上物ニハ紫檀、花梨ヲ用フ。

三 材料ノ處理

せんヲ使用スルモノハ甲板ハ普通七分二枚又ハ八分二枚ノモノヲ用ヒ、脚ハ一寸二分角長サ一尺ノモノヲ用フ。

組立テハ總テ錐モミヲナシ、金釘ヲ用ヒ木埋メヲナシ、押シ糊ハ一切使用セズ。仕上ゲハせんニアリテハ重格魯謨酸加里及ビ阿仙藥ヲ以テ色附ケヲ施シ、蠟仕上ゲヲナス。けやきニアリテハ色附ケヲナサズ直チニ漆仕上ゲトナス。

大キサハ二尺五寸ヨリ尺三寸角までノ數種アリ、二尺以下ノモノハ寸落チトナル。

二尺角物ニ要スル材積、約七、五才トス。今左ニ二尺角物仕上がり費用ヲ示サン。

甲板(せん板八分二枚板) ○円二〇〇。脚其ノ他ノ附屬 ○円一七五。工賃 ○円一四〇。色附ケ仕上ゲ ○円〇四〇。計○円五五五

また、チャブ台に関しては「勝手用具」, p.317の項にも次のような記述がある。

茶部臺ハ指物師ノ手ニ成リ、けやき製ハ上等ナレドモ數少ナク、せん茶部臺ハ最モ多數ヲ占メ、

平均一日ニ約五百個ヲ製作スベシトイフ。

10) 山口昌伴, 「チャブ台の正体-その姿と形の変遷とその意味」, 石毛直道・井上忠司編, 『前掲』, pp.147-198, 国立民族学博物館, 1991

11) 『明治前期産業発達史資料 勸業博覧会資料；

- 64-83], 第四回内国勸業博覧会出品目録(事務局), 明治24年, 明治文献資料刊行会, 昭和49(1974)年
- 12) 『明治前期産業発達史資料 勸業博覧会資料; 9,14-31』, 第五回内国勸業博覧会出品目録(事務局), 明治36年, 明治文献資料刊行会, 昭和48(1973)年
- 13) 多田道太郎, 「昔, ちゃぶ台というものがあつた」『風俗学』, pp.66-83, 筑摩書房, 1978  
これは, 諸井薫編, 『昭和生活文化年代記3 30年代』, pp.38-45, TOTO出版, 1991に再録され, 『多田道太郎著作集・現代風俗ノート』にも収められている。pp.50-59, 筑摩書房, 1994
- 14) 石毛直道: 「食卓の変化」祖父江孝男、杉田繁治編『現代日本における伝統と変容 暮らしの美意識』, pp.32-54, ドメス出版, 1984
- 15) 石毛直道, 『食事の文明論』中公新書, 1982
- 16) 村本孝博・平井聖「前掲」, pp.94-104
- 17) 秋谷重雄・吉田忠著『食料・農業問題全集17 食生活変貌のベクトル 連続と断絶の一世紀』(社)農産漁村文化協会, 1988  
吉田忠執筆「ちゃぶ台・ご用聞き・小売市場」, 第3章, pp.43-71
- 18) 石毛直道・井上忠司編, 『前掲』
- 19) 井上忠司, 「食卓生活史の調査と分析」, 石毛直道・井上忠司編, 『前掲』, pp.55-82
- 20) 夏目漱石, 『門』, 新潮文庫, 昭和23(1948)年初版
- 21) 森田草平, 『煤煙』, 『現代文学全集22 寺田寅彦・森田草平・鈴木三重吉集』, 筑摩書房, 昭和30(1955)年
- 22) 片岡良一, 「森田草平の位置と作風」, 『現代文学全集22 寺田寅彦・森田草平・鈴木三重吉集』, p.404, 筑摩書房, 昭和30(1955)年
- 23) 徳田秋聲『新所帯』『現代日本文学全集 第十八篇 徳田秋聲集』, 改造社, 昭和3年
- 24) 徳田秋聲「年譜」, 『前掲』, p.508
- 25) 村本孝博・平井聖, 「前掲」, p.98